

高等学校日语专业教材系列

日本近现代 文学作品选读

(第二版)

吴鲁鄂 主编



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

H369.4/82=2

2012

高等学校日语专业教材系列

日本近现代 文学作品选读

(第二版)

主 编 吴鲁鄂

参编人员 吴鲁鄂 (日) 神田英敬 李故静 吴罗娟



北方工业大学图书馆



C00314067



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学作品选读/吴鲁鄂主编. —2版. —武汉: 武汉大学出版社, 2012. 7

高等学校日语专业教材系列

ISBN 978-7-307-09804-6

I. 日… II. 吴… III. 日语—阅读教学—高等学校—教材
IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 100923 号

责任编辑: 叶玲利 责任校对: 刘欣 版式设计: 支笛

出版发行: 武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件: cbs22@whu.edu.cn 网址: www.wdp.com.cn)

印刷: 湖北民政印刷厂

开本: 720 × 1000 1/16 印张: 24.75 字数: 456 千字 插页: 1

版次: 2006 年 1 月第 1 版 2012 年 7 月第 2 版

2012 年 7 月第 2 版第 1 次印刷

ISBN 978-7-307-09804-6/H · 893 定价: 39.00 元

版权所有, 不得翻印; 凡购我社的图书, 如有质量问题, 请与当地图书销售部门联系调换。

第二版前言

吴鲁鄂

本教材为武汉大学“十五”规划教材，旨在引导学生掌握解读日本文学作品的基本技巧和方法，了解日本近现代文学发展的进程，把握日本人的审美意识、价值取向、思想活动规律，从而提高学生文学阅读、赏析能力，可供大学日本语言文学系高年级及硕士研究生的日本文学课程选用。

教材在作品的择选上，较多地编入了带有“反近代”^①“反危机”倾向的作品，同时也兼顾到日本近现代各个时期、各个不同流派的代表作。教材共选作品（小说）15部，每部作品（部分为节选）均附有[解题]、[作家简介]、[作品简介]、[读解参考]、[研究现状]、[思考问题]、[参考文献]等资料，供教师课堂教学、学生自学参考使用。作为附录教材除附有[日本近代文学史年表]外，还增添了[文学作品读解要领]一项，以期学习者能通过具体作品赏析的实践，全面掌握文学作品解读的方法。

本教材的主编吴鲁鄂系武汉大学日语系教授，主要从事大学本科、硕士研究生的日本文学课程教学工作。本教材的编写模式基于编者对文学课教学方式的探讨和对文学课教学过程中经验教训的总结之上，方便实用。但是，由于编者本人水平有限，会有许多不足之处，欢迎各位使用者提出宝贵意见。另外，考虑到个别作品较为苦涩难懂，而中国方面又有极好的参考资料，所以尽管教材全以日语撰写，但还是选用了个别中国方面的研究资料。现今中国的日本文学研究发展迅速，关注中国国内的研究会起到很好的参考作用。

本教材自2006年1月第一版发行后多次重印，经过反复的教学实践和广泛听取使用院校的建议，本次修订除更新研究信息之外，增补了《挪威的森林》等三部现代文学作品和日本近现代文学年表，拓宽了教材使用空间。当

① 反近代：反对一味地模仿西方。此概念由三好行雄提出。见《日本文学的近代与反近代》。日本·东京大学出版会，1972年。

然，由于编者能力有限，错误在所难免，各位同仁在使用过程中如果发现不当之处，欢迎提出批评指正意见，以便我们更好地完善本教材。另外，本教材的出版得到了武汉大学出版社编审王春阁老师、编辑部叶玲利主任的鼎力相助，在此深表谢意。



吴鲁鄂

2012年5月27日

学文本日新编... 美审的人本日... 出版得到了武汉大学出版社编审王春阁老师、编辑部叶玲利主任的鼎力相助，在此深表谢意。

学文本日新编... 出版得到了武汉大学出版社编审王春阁老师、编辑部叶玲利主任的鼎力相助，在此深表谢意。

目次

103	参考文献	19
102	参考文献	20
101	思考問題	20
100	参考文献	22
目次			
111	門主羅 題五葉	
121	小説家評	
第一課 浮雲		1
122	作家紹介	19
123	作品紹介	20
124	読解参考	20
125	研究情報	22
126	思考問題	23
127	参考文献	23
136	小説家評	
第二課 舞姫		24
138	作家紹介	51
140	作品紹介	52
141	読解参考	52
141	研究情報	54
141	思考問題	55
143	参考文献	56
148	小説家評	
第三課 破戒		57
150	作家紹介	69
151	作品紹介	70
152	読解参考	70
152	研究情報	72
152	思考問題	73
159	参考文献	74
164	小説家評	
第四課 ころ		75
162	作家紹介	100
168	作品紹介	102

2 | 日本近现代文学作品选读

	読解参考	103
	研究情報	105
	思考問題	107
	参考文献	108
目 次		
第五課	羅生門	110
	作家紹介	120
	作品紹介	121
	読解参考	122
	研究情報	124
	思考問題	125
	参考文献	126
第六課	城の崎にて	128
	作家紹介	136
	作品紹介	137
	読解参考	138
	研究情報	140
	思考問題	141
	参考文献	141
第七課	セメント樽の中の手紙	143
	作家紹介	148
	作品紹介	149
	読解参考	150
	研究情報	153
	思考問題	153
	参考文献	155
第八課	檸檬	156
	作家紹介	164
	作品紹介	165
	読解参考	165
	研究情報	168

	思考問題	169
	参考文献	170
第九課	伊豆の踊子	172
	作家紹介	202
	作品紹介	204
	読解参考	204
	研究情報	206
	思考問題	207
	参考文献	208
第十課	山月記	210
	作家紹介	220
	作品紹介	222
	読解参考	222
	研究情報	224
	思考問題	225
	参考文献	226
第十一課	野火	228
	作家紹介	247
	作品紹介	249
	読解参考	250
	研究情報	253
	思考問題	254
	参考文献	254
第十二課	氷壁	256
	作家紹介	275
	作品紹介	276
	読解参考	277
	研究情報	279
	思考問題	280
	参考文献	280

4 | 日本近現代文学作品選読

第十三課	「万延元年のフットボール」	282
	作家紹介	302
	作品紹介	303
	読解参考	304
	研究情報	308
	思考問題	309
	参考文献	309
第十四課	ノルウェイの森	311
	作家紹介	323
	作品紹介	323
	読解参考	324
	研究情報	327
	思考問題	328
	参考文献	329
第十五課	キッチン	330
	作家紹介	369
	作品紹介	369
	読解参考	370
	研究情報	371
	思考問題	372
	参考文献	373
附録1	文学作品読解要領	374
附録2	日本近現代文学年表	379

一 浮雲

ふたばていしめい
二葉亭四迷

【**解題**】 中編小説。第一編は1887（明治20）年6月、第二編は翌年の2月、坪内逍遙の名を借りて金港堂によって出版。第三編は1889（明治22）年7月から8月にかけて、二葉亭四迷の名で金港堂の文芸雑誌「都の花」に発表。全篇合本は1898（明治31）年9月、金港堂によって刊行。本文は第一編より抄録したものである。『現代日本の文学Ⅰ』学習研究社1978年版によった。

〔前半部分のあらまし〕 内海文三は早く父を失い、十五歳の時母を静岡に残して上京し、叔父園田孫兵衛の家に下宿した。その後給費生となって、苦学し優秀な成績で卒業して、某省の下級官吏となった。園田家では叔父は不在勝ちで、叔母のお政は無教養で如才のないしっかり者、娘のお勢はわがままに育って軽佻な性格だが、新しい教育を受けている。文三は卒業してから毎日お勢と顔を合わせるようになり、また彼女に英語を教えるようになって、お勢も少し地味で淑やかになった。文三の心の中ではお勢に対する恋慕の情が高まりつつあった。だが、文三はその内気な性格のため悶々の情を抱いているだけでなかなか彼女に打ち明けかね、お勢は文三の気持を察しながら知らないふりをしている。叔父もお政もお勢を文三に添わせたい気持ちで、年の改まるのを待っている。そうした折から文三は役所を論旨免職になった。文三は免職の事をお政に打ち明けかねた。

枕もとで喚覚ます下女の声に見果てぬ夢を驚かされて、文三がうろたえた顔を振揚げて向こうを見れば、はや障子には朝日影が斜めに射している。「ヤレ寝過ごしたか……」と思う間もなく引き続いてムクムクと浮み上がった「免職」の二字で狭い胸がまずふさがる……^{おんぼこ} 茛苳^①を振り掛けられたしにがえる^み 死蕪の身でおどり上がり、衣服をあらためて、夜の物を揚げあえず^②、^{ようじ} 楊枝^③を口へ頬ばり故手ぬぐいを前帯にはきんで、あわてて二階を降りる。

その足音を聞きつけてか奥の間で「文さんはやくしないと遅くなるヨ。」トいうお政の声に圭角はないが、文三の胸にはぎっくり応えて返答にもまごつく。そこで頬ばっていた楊枝をこれ^{さいわ} 幸いと、われにもわからぬでたらめを句籠りがちに言っ^{くごも} てまず一寸のがれ、そこそこに顔洗^あ って朝飯の膳^{ぜん}に向かったが、胸のみふさがって箸の歩みも止まりがち、三膳の飯を二膳で済^すまして、いつもならグッと突き出す膳もソッと片寄^{かたよ}せるほどの心づかい、^{からだ} 身体までにわか^{から}に小さくなったように思われる。

文三が食事を済まして縁側を回りひそかに奥の間をのぞいて見れば、お政ばかりでお勢の姿は見えぬ。お勢は近ごろ^{そうちよう} 早朝より駿河台^{するがだいへん} 辺へ英語のけいこにまいるようになったことゆえ、さては今日ももう出かけたのかとおそ^{おそ} 恐る座舗へ入^{ざしき} ってくる。その文三の顔を見て今まで火鉢の琢磨^{ひばち すりみが}きをしていたお政がにわか^{つや}に光沢布巾の手を止めて不思議そうな顔をしたそのはず、この時の文三の顔色がツイ^④一通りの顔色でない、蒼ざめていて力なき

① 茛苳：オオバコ科の多年草。道端などの踏み固められた所に生える。漢方では種子を車前子、葉を車前葉といい、薬用。若葉は食用。

② 揚げあえず：あげもしない。

③ 楊枝：歯のあかをとる、きれいにするための道具。楊柳の材の先端をたたいて総状にしたもの。ふき楊枝。ここでは歯ブラシの意味。

④ ツイ：ちよつと。

それで、悲し^{うら}そう^{うら}で恨めし^{うら}そう^{うら}で、恥かし^{はにか}そう^{はにか}で、イヤハヤ何とも言いよ
うがない。

「文さんどうかおしか^①、大^お変^{へん}顔^{がん}色^{しき}がわりいヨ。」

「イエどうもしませぬが……」

「それじゃアはやくおしヨ。ソレごらん^な、モウ八^{はち}時^じにならアネ^②。」

「エーまだお話し……申^ましませ^まんでしたが……実^まは。ス、さくじつ……
め……め……」

息^{いき}気^きはつまる、冷^{ひや}汗^{あせ}は流^{なが}れる、顔^{かほ}はあかくなる、いかにしても言い切れぬ。
しばらく無^む言^{ごん}でいて、さら^さらに出^で直^{なお}して

「ム、めん職^{しやく}になりました。」

ト一^{ひと}思^{おも}いに言^いい放^{はな}つて、ハッ^つと差^さしうつ向^むいてしまう。聞^きくと等^{ひと}しくお政^{せい}
は手^てに持^もつていた光^あ沢^ざ布^ふ巾^{きん}を宙^{ちゆう}に釣^つるして、「オヤ」と一^{ひと}声^{こゑ}叫^{こゑ}んで身^みを反^そ
らしたま^ま一^{いっ}句^くも出^いでばこそ^③、しばらくはただ茫^{ぼう}然^{ぜん}として文^{ぶん}三^{さん}の貌^{かお}をみ
つめていたが、ややあつてせわしく布^ふ巾^{きん}をほうり出^こして小^こ膝^{ひざ}を進^{すす}ませ、

「エ御^ご免^{めん}におなりだとエ^④……オヤマどうしてマア。」

「ど、ど、どうしてだか……私^{わたし}にもわかりませんが……大^お方^{かた}……ひ、
人^{ひと}減^へらしで……」

「オーヤオーヤしようがないネー、ママ御^ご免^{めん}になつてサ。ほんとうにしよ
うがないネー。」

- ① おしか: 「お」は尊敬の意を表す接頭語。「し」はするの連用形。目上の人が目下の
人に対してよくこうした話し方をする。
- ② ならアネ: ならうね。
- ③ 出でばこそ: 文語動詞「出づ」の未然形+接続助詞「ば」+係助詞「こそ」、終助
詞的に用いて強い否定の意を表す。……などするものか。
- ④ とエ: 引用の格助詞「と」+念を押したり、語気を強めたりする気持ちを添える終
助詞「え」。

と落胆した容子。しばらくあって

「マアそれはそうと、これからはどうしていくつもりだエ。」

「どうもしようがありませんから、母親にはもう少し国にいてもらって、私はまた官員の口でもさがそうかと思えます。」

「官員の口でッたッてチョックラ、チョイと①ありやアよし、なかろうもんならまたいつか②のような憂い思いをしなくッちやアならないやアネ③……だからあたしが言わない事ちやアないんだ④、ちいと⑤課長さんの所へも御機嫌伺いにおいでおいでと口の酸っぱくなるほど言っても強情張ッておいででなかったもんだから、それでこんな事になったんだヨ。」

「まさかそういうわけでもありますまいが……」

「イイエきつとそうに違いないヨ。デなくッてなんぼ⑥人減らしたッて罪も咎もない者をそうむやみに御免になさるはずがないやアネ……それとも何か御免になってもしようがないようなわりい事をした覚えがおありか。」

「イエ何も悪いことをした覚えはありませんが……」

「ソレごらんナネ。」

兩人ともしばらく無言。

「アノ本田さんは（この男のことは第六回に詳しく）どうだったエ。」

「彼の男はようござんした。」

「オヤよかったかい、そうかい、運のいい方はどっちへ回ってもいいん

① チョックラ、チョイと：ちよつと、すこし。
 ② いつか：いつか。
 ③ しなくッちやアならないやアネ：しなくてはならないよね。
 ④ 言わない事ちやアないんだ：言ったことがあるのではないか。
 ⑤ ちいと：ちよつと。
 ⑥ デなくッてなんぼ：いくら。

だネー。それというがぜんたいあの方は如才じょさいがなくって発明はつめい①で、ハキハキしておいでなされるからだヨ。それに聞けば課長さんの所へも常じょうふだん不断御機嫌伺いにおいでなされるという事だ②から、きっとそれでこんどもよかったのに違いないヨ。だからお前さんもわたしの言う事をきいて課長さんに取り入って置きゃア今度もやっぱりよかったのかもしれないけども、人の言う事をおききでなかったもんだからそれでこんな事になっちまったんだ。」

「それはそうかもしれませんが、しかしいくら免職になるのが恐いと言こわって私にはそんなそんな鄙劣ひれつな事は……」

「できないとお言いのか……フンやせ我慢がまんをお言いでない、そんなりょうけんかたりょうけんかた了簡方③だから課長さんにも睨ねめられたんだ。マアヨーク考えてごらん、本田さんのようなあんな方でさえ御免になつてはならないと思いなされるもんだから手間暇てまひまかいで④課長さんに取り入ろうとなされるんじゃアないか、ましてお前さんなんざアそう言っちゃアなんだけれども、本田さんから見りやア……なんだから、なおさらの事だ。⑤それもネーこれがお前さん一人の事なら風見かざみの鳥からすみたように高くばっかり止まって食うや食わずにいようといまいとそりゃアもうどうなりと御勝手次第おかつてしだいさ、けれどもお前さんにはおっかさんというのがあるじゃアないかエ。」

母親と聞いて文三のしおれ返るを見てお政はよい責め道具せ どうぐを見つけたという顔つき、長羅宇ながらう⑥の煙管きせるで席をたたくをキッカケに、

① 発明：賢いこと。

② 「た」 = 「だ」。原作の表記による。

③ 了簡方：考え。思慮。

④ 手間暇：手間暇かけて。

⑤ まして…なおさらの事だ：ましてお前さんなどは、はっきり言つては悪いけど、本田さんに比べるとまるで愚図なのだから、なおさらご機嫌伺いに行くべきだ。

⑥ 長羅宇：セルの雁首と吸い口をつなぐ竹の管。

「イエサ^①おっかさんがおかわいそうじゃアないかエ。マアとっくり胸に手をあてて考えてごらん。おっかさんだっておとっさんには早くお別れなさるし、今じゃたよりにするなア^②お前さんばかりだから、どんなに心細^{こころほそ}いかしれない。なにもああしてお国で一人暮らしの不自由な思いをしておいでなさりたくもあるまいけれども、それもこれもみんなお前さんの立身^{りっしん}するばかりを楽しみにして辛抱^{しんぼう}しておいでなさるんだヨ。そこをすこしでも汲み分けておいでなら、たとえどんなつらいと思う事があってもいやだと思^しう事があっても我慢^{しめつけ}をしてサ、石にかじりついても出世^{しゅっせ}をしなくっちゃアならないと心がけなければならない所だ。それをお前さんのように、や人のきげんを取るのはいやだの、やそんな鄙劣^{ひれつ}な事はできないのと^③そんなわがまま^ま気ままを言^いっておっかさんまで路頭^{ろとう}に迷^{まよ}わしちやア、今日冥利^{きょうみょうり}がわりいじゃないか。それやアモウお前さんは自分の勝手に苦労するんだからかまうまいけれども、それじゃアおっかさんがおかわいそうじゃアないかい。」

ト層^{かさ}にかかって極^きめつけけれど、文三^{ぶんぞう}は差^さし向^{むか}いたままで返答^{へんとう}をしない。

「アアアおっかあさんもあんなに今年の暮^くれを楽しみにしておいでなさる所だから、今度御免^{ごめん}におなりだとお聞きなすつたらさぞマアがっかりなさることだろうか、年をとって御苦労^{ご苦労}なさるのを見るとほんとにお痛^{いたま}しいようだ。」

「実に母親^{めんぼく}には面目^{めんぼく}がござんせん。」

「あたりまえサ。二十三にもなっておっかさん一人さえ楽^{らく}に養^{やしな}す事ができないんだものヲ。フン面目^{めんぼく}がなくてサ。」

① イエサ：いやさ。

② たよりにするなア：たよりにするのは。

③ や：他人の話の前に置かれて、引用の意を表す。

トツンと済まして空うそぶき、煙草を環に吹いている。そのお政の半面を文三は畏らしい顔をしてきつと睨つけ、何事かを言わんとしたが①……気を取り直してにっこり微笑したつもりでも顔へあらわれた所は苦笑い、震い声ともつかず笑い声もつかぬ声で

「へへへへ面目はござんせんが、しかし……で……できた事なら……しようがありません。」

「何だとエ。」
トいいながら徐かにこなたを振り向いたお政の顔を見れば、いつしか額に芋蠅ほどの青筋を張らせ、肝癩の背を釣り上げて②唇をヒン③曲げている。

「イエサ何とお言いだ。できた事ならしようがありませんと……だれがでかした事たエ、だれが御免になるように仕向けこんだエ、みんな自分の頑固から起こった事じゃアないか。それも傍で気を付かぬ事か、さんざつぱら④人に世話を焼かして置いて、今さら御免になりながら面目ないとも思わないで、できた事ならしようがありませんとは何の事たエ。それはお前さんあんまりというもんだ、あんまり人を踏み付けにするとする者だ。ぜんたいマア人を何だと思っておいでだ。そりゃアお前さんの事だから鬼老婆とか糞老婆とか言って他人にしておいでかもしれないが、わたしアどこまでも叔母のつもりだヨ。ナアニこれが他人で見るといい、お前さんが御免になつたってならなくつたってこっちにゃア痛くも痒くも何ともない事だから、何で世話を焼くもんですか。けれども血はつながらずとも縁あつて叔母とな

① 言わんとしたが：言おうとしたが。
② 額に…釣り上げて：非常に怒る様子。
③ ヒン：[接頭] 動詞などの上に付き、その意を強める。
④ さんざつぱら：さんざん。

おい
 り甥となりして見れば、そうしたものじゃありません。ましてお前さんは十四の春ポツと出の山出しの時から、長の年月このわたしは婦人の手一ツで頭から足の爪頭までのことを世話アしたから、わたしはお前さんをこめいわく御迷惑かは知らないが血を分けた子息同様に思っています。ああやってお勢やいさみ勇という子供があっても、すこしも陰陽なく①している事がお前さんにゃアわからないかエ。今までだってもそうだ、どうぞマア文さんも首尾よく立身して早くおっかあさんをこっちへお呼び申すようにしてあげたいもんだと思わないことはただの一日もありません。そんなに思っている所だものヲ、お前さんが御免におなりだと聞いちゃアあたしは愉快はしないよ、愉快はしないからアア困った事になったと思って、ヤレこれからはどうしていくつもりだ、ヤレお前さんの身になったらさぞおっかさんに面目があるまいと、人事にしないで嘆いたり悔やんだりして心配してる所だから、ぜんたいなら②「叔母さんの了簡に就かなくてこう御免になって、まことに面目がありません」とか何とか詫び言の一言でも言うはずの所だけれど、それも言わないでもよし聞きたくもないが、人の言う事を取り上げなくて御免になりながら、糞落ち着きに落ち着き払って、できた事ならしようがありませんとは何の事たエ。マどこを押せばそんな音が出ます③……アアアアつまらない心配をした、こっちはどこまでも実の甥と思って心を付けたり世話を焼いたりして信切を尽くしていても、先様じゃア屁とも思し召さない。」

「イヤ決してそう言うわけじゃありませんが、ご存じの通り口不調法

① 陰陽なく：公平。

② ぜんたいなら：本来なら。

③ どこを押せばそんな音が出ます：人を叱る時の言葉。